

# 薛聡の釈読口訣と韓国古代の儒学教育

東国大学校 教授 朴 鐘培 著  
獨協大学 教授 川村 肇 訳

## Seolchong's Seokdok Gugyeol of Confucian Texts and Confucian Education in Ancient Korea

Park, Jong-Bae Dongguk University  
Translated by KAWAMURA Hajime

朴鍾培（パク・ゾンベ 박 종배）

ソウル大学校、ソウル大学校大学院教育学科を経て、2003年、博士学位取得。2008年から東国大学校師範大学（教育学科）教授。

主な関心分野は韓国教育史、東アジア伝統教育比較研究、韓国現代教育問題など。代表的な業績に、「四書中心の儒学教育課程の成立とその意義」（2005年）、「学規に現れた朝鮮時代の書院教育の理念と実際」（2010年）などがある。

本論文は、韓国教育史学会『韓国教育史学』第40巻第3号（2018年、141-165頁）に掲載された。

### I. 序論

薛聡（655- ?）は私たちになじみ深い歴史の人物である<sup>1</sup>。彼が漢字の音と意味を借りて、韓国語を書く吏読という表記法を創始したことは、韓国史の基本的な常識として通っている。ところで、韓国教育史では、薛聡はどのような

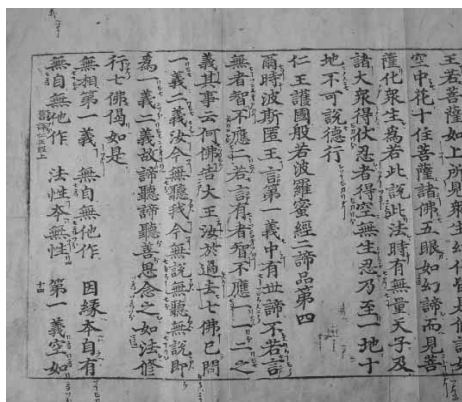
1 僧元曉（617-686）の息子として生まれたことから、当時はもちろん今日までも人々の関心を引く要素を持っている。かれが神文王（在位：681-692）に聴かせた寓言を書き記した花王戒は、朝鮮時代の『東文選』（「奏議」〈諷王書〉『東文選』52巻）は、いうまでもなく、現代の古典文学教材にも収録されているほど、擬人文学の先駆として広く知られている。

意味をもつ人物なのか、言い換えれば、彼が教育史方面で達成した業績は何で、それはどのような意味をもっているのか、などと自問して見ると、答えはそれほど簡単ではない。しかし、薛聡は高麗顯宗時代の1022年に、弘儒侯に追贈されて、文廟に合祀され、朝鮮朝末まで韓国伝統教育において師表としての地位を保っている人物である。こうして見ると、少なくとも教育史分野の場合、薛聡はなじみ深くはあるものの、実はまだきちんと光が当てられていない人物だということができる。

薛聡が韓国教育史でどのような地位にある人物かを示す資料は、『三国史記』と『三国遺事』に載っている彼に関する記事である。まず『三国史記』では「薛聡は元々聡明かつ鋭敏で、生まれてから道理と学術を知り、方言で九経を読み、後学を教えたが、今でも学者たちが彼を模範としている」<sup>2</sup>と書かれている。薛聡が九経を「方言」、つまり韓国語で解説して後生を教えたが、九経に対する薛聡の韓国語解は「今」、つまり『三国史記』が書かれた1145（仁宗23）年ころまでも、学者たちが手本として尊んでいたということだ。そして『三国遺事』では「方音で、中国と韓国の方言と俗語の物の名前を互いに通じて理解し合い（または、「風俗と事物の名前を滞りなく理解し）」、六経と文学の意味を解して、今でも韓国で明経を業としている者たちが伝えてやまない」としている<sup>3</sup>。記事を見ると、薛聡が「方音」、つまり韓国語で経書と文学書を解したことが、一然（1206-1289）が『三国遺事』を執筆した時期まで手本として尊崇されていたということが分かる。この二つの記事を通して、私たちは非常に重要な事実を確認することができる。例えば、薛聡が「九経」や「六経」、「文学」と称される訓詁学・詞章学時代の主要な儒学テキストを韓国語に解して後生たちを教え、主要テキストに薛聡が付した韓国語解は、高麗後期まで標準として通用していたという点である。一旦このような事実だけを通して、薛聡が韓国古代の儒学教育で非常に重要な位置にあった人物だという点を確認することができる。しかし、彼がなした業績が、教育史で持つ意義を理解するためには、まず彼の業績の実体について、より詳細に確認することが必要である。これに関連して、本論で特に注目したいのは、釈読口訣である<sup>4</sup>。

2 『三国史記』46巻、列伝6に「薛聡：聡性明敏、生知道術、以方言読九経、訓導後生、至今学者宗之」とある。

3 『三国史記』4巻、義解に「元曉不羈：以方言音通会華夷方俗名物、訓解六経文学、至今海東業明経者、伝受不絶」とある。



【図1】旧訳仁王經

釈読口訣は、漢文に韓国語の助詞や語尾、または末音添記に当たる「吐」を付して、その漢文を韓国語に解釈して読む独特の漢文読法である<sup>5</sup>。この釈読口訣は、漢文テキストを韓国語に解説して読む方法であり、それをテキストに表記する手段でもあった。薛聡が中国で仕入れた様々な漢文テキストを韓国語に解したということは、すなわち薛聡が訓詁・詞章学の主要テキストについて釈読口訣を施したことを意味する。このテキストに韓国語の助詞や語尾、または末音添記を表す「吐」などを記入し、その漢文テキストを韓国語で読む方法を表記したということを意味するのである。もし薛聡が韓国語解釈をテキストに表記せず、口伝だけしたとしたら、その韓国語解釈がいくら正確で素晴らしいものだったとしても、数百年間伝授されることは不可能だっただろう。幸いなことに、薛聡が活躍した8世紀ころの新羅には<sup>6</sup>、既に漢字を利用して韓国

4 薛聡の釈読口訣に関する韓国教育分野の研究は、安京植「新羅国学の「地域化」過程研究」韓国教育史学会『韓国教育史学』第38巻第4号、2016年、129-134頁で「授業過程の「地域化」」という側面から論述されたことがある。この論文では、薛聡が吏読を活用し、漢文の文章を新羅の言葉に区切って読む方法を集成して、新羅国学の經典教育の地域化に大きく寄与したと見ている。本論では、これと同じような問題意識から、釈読口訣の原理と形態、釈読口訣の目的と活用、釈読口訣と儒学教育の関係などの問題に関して、より詳しく論じようとする。

5 南豊鉉「薛聡と借字表記法」『新国語生活』第11巻第3号、2001年、24頁。

6 薛聡の生没年代は正確には分かっていないが、大体7世紀後半に生まれ、8世紀前半まで生存したと考えられている。

語を表記する借字表記法が非常に発達し、漢字を借りて自身の言葉をほぼ完璧に表現する郷札の段階までに至った<sup>7</sup>。薛聡はその間に発展してきた借字表記の方法を土台に<sup>8</sup>、漢文テキストに韓国語解釈を書き置く方法である釈読口訣を体系化した。この釈読口訣という記録手段を持っていることによって、漢文テキストへの薛聡の韓国語解釈は、高麗後期まで伝承されえたのである。本論で、薛聡が韓国古代の儒教教育で成し遂げた革新の核心として浮き彫りにしようとするのが、まさにこの釈読口訣である。

以下、本論では、まず吏読・郷札のような漢字の音と訓を借りて、韓国語を表記したその他の借字表記法との比較を通して、釈読口訣の特徴をより詳しく検討し、続いて釈読口訣の詳細な原理と形態について見ていこうと思う。現在、薛聡の釈読口訣を含んでいる文献は伝わっていないが、次の二種の資料を通して、薛聡が体系化した釈読口訣の原理と形態について推定することが可能となった。その一つは、1973年に忠清南道瑞山郡文殊寺の金銅如来坐像の腹蔵物の中から出てきた『旧訳仁王経』5巻を含む<sup>9</sup>、釈読口訣が記された高麗時代の仏教經典である。もう一つの種類の資料は、新羅から伝来し、現在日本の東大寺の正倉院などに所蔵されている、新羅の高僧が撰述した仏典<sup>10</sup>の訓点<sup>11</sup>資料である。これらの資料を通して、釈読口訣の原理と形態について論じたあとで、釈読口訣が何を目的に行われ、それがどのように活用されたのかを考察しようと思う。以下でより詳細に調べていくが、釈読口訣は教育目的で行われ、教育現場で幅広く活用された。薛聡の釈読口訣は訓詁・詞章学時代の儒学教育と不可分の関係にあるものなのだ。この点を明らかにし、韓国教育史研究で、口訣が重要な議論のテーマの一つとしての位置を得るようにすることが、本論の目的の一つである。

7 尹善泰「木簡に見る漢字文化の受容と併用」『新羅文化』第32集、2008年、188頁。

8 このため、しばしば薛聡が吏読という借字表記法を創成したとか、創案したといわれることがあるが、薛聡はそれ以前から行われてきた吏読式借字法を整理、または集大成したものと見るのが正しい。これについては、金恒洙「新羅儒学と薛聡の学問」『新国語生活』第11巻第3号、2001年、等参照。

9 李基文「我が国の文字史の流れ」『口訣研究』第14集、2005年、等参照。

10 小林芳規著、チョン・ジェヨン、アン・ジョンギョン、キム・ジョンビン、ヨン・ギュドン訳『角筆の文化史—見えない文字を読む』（韓国文化社、2014年）257-302頁。「第10話角筆で書いた新羅語の発見」等、参照。

11 日本では、韓国の口訣に当たる資料を、一般に訓点資料と通称する。

## Ⅱ．韓国古代の借字表記法と釈読口訣

韓国は、中国から漢字を輸入して用いてきた中でも、我々の固有語を使う伝統を守ってきた<sup>12</sup>。これによって、固有の土着語を音声言語、つまり口語として使う一方、漢字を文字言語、つまり文語として使う、非常に特殊な二重体制が形成された<sup>13</sup>。この過程で漢字の音と訓を借りて固有語を表記する多様な方法、いわゆる「借字表記法」が発達した。周知のごとく、我が国の借字表記法は、大きく吏読、郷札、口訣に分けられる。これらは、薛聡が創案したように思われており、大体吏読と通称されている<sup>14</sup>。しかし借字表記法は薛聡以前から発展してきており、薛聡の代になって体系化されたものと見られ<sup>15</sup>、吏読と郷札、口訣、それぞれの目的と用途を区分して見る必要がある<sup>16</sup>。以下では、まず吏読、郷札と口訣の共通点と相違点を比較考察し、続いて薛聡にいたって体系化された釈読口訣の原理と形態についてさらに詳しく検討して見る。

### 1．吏読、郷札そして口訣

#### 1) 吏読

吏読は、吏書、吏道、吏札、俚文とも呼ばれるが、これを薛聡が作ったという記録は朝鮮初期の様々な資料に現れる<sup>17</sup>。最も早いものでは、金祇が書いた『大明律直解』（1395年、太宗4）の跋文である。そこでは、「さらに、我が国は三韓時代に薛聡が作った方言文字があり、吏道というが、この地（訳注：朝鮮）の風習であるかのごとく読みなれ熟達しているため、急には変えることができない」としている。この吏道（つまり吏読）を利用して、『大明律』を翻訳したのが『大明律直解』だとして、その具体的な形態は次のようになっている。

①原文：凡妻無應出及義絶之狀而出之者杖八十雖犯七出有三不去而出之者減二

12 同じ漢字文化圏の中で、ベトナム、日本も同様である。

13 前掲李基文論文、234頁。

14 安秉禧「薛聡と国語」『新国語生活』第11巻第3号、2001年、ユ・ミョンウ（유명우）「韓国翻訳史から見る朝鮮朝諺解翻訳」韓国翻訳学会『翻訳学研究』第5巻第2号、2004年、等参照。

15 金永旭「古代韓国木簡に見る釈読表記について」韓国木簡学会学術大会、2007年、等参照。

16 南豊鉉『口訣研究』太学社、1999年、14頁。

## 等追還完娶

- ②吏読翻訳：凡妻亦可黜可絶之事無去乙黜送爲在乙良杖八十齊必于七出乙犯爲去乃三不出去有去乙黜送爲在乙良減二等遣婦女還本夫齊（『大明律直解』6、9b）<sup>18</sup>

ここで、亦（ㅣ）、無去乙（없거늘）、爲在乙良（하거들랑）、齊（-하라）、必于（비록）、爲去乃（하거나）、有去乙（있거늘）、遣（고）などが漢字の音や訓で標記した韓国語文法素に当たる。このように、吏読は法令や実用文書に挿入された韓国語要素を示しているが<sup>19</sup>、吏読を使う主たる目的は、様々な意味に解釈されることを防止し、文章の意味を明らかにしようとするものだという。ハングル創成以前まで、吏読は官庁や民間で広く使われたが、これと関連して、崔万理は、諺文創成反対の上訴（1444年）で「新羅の薛聡の吏読は、仮に野卑で下品だとしても、すべて中国で通用している文字を借用し、語助辞として書いているため、文字とそもそも互いに離れることができないのです」としており、鄭麟趾が『訓民正音解例』の序文に、「かつて新羅の薛聡が吏読を初めて作り、官庁や民間で今日まで使われている」と書いたものがある<sup>20</sup>。その他、『慶尙道地理志』慶州府編（1425年、世宗7）と『東國輿地勝覽』（1481年、成宗12）慶州府編、人物条の「薛聡」でも、それぞれ「薛聡は……俚文を作り、世の中に伝え、一人一人が簡単に分かるようにして、今日までそれに頼っている」、「俚語で吏札を作り、官庁で使うようになった」と記録している。

以上の内容を総合してみると、吏読は広義では漢文を活用した韓国語表記法、つまり借字表記法の代名詞といえるが、狭義では、主に官庁の公文書や民間の実用書に書く韓国語文法素（助詞など）を指しているといえることができる。

一方、吏読は、前述の『大明律直解』のように、漢文を韓国語に翻訳するのにも使われたが、この時には、原文の語順の一部が韓国語に近づけて変えられた。このように漢字になってはいるが、韓国語の語順文法構造を帯びている格好の事例が「壬申誓記石」の次のような文章である。

17 以下、前掲安秉禧論文、9-12頁参照。

18 前掲ユ・ミョンウ論文、73頁から重引。

19 前掲南豊鉉『口訣研究』14頁。

20 以上の二つの資料は、前掲安秉禧論文、10頁から重引。



- ①韓国語：임신년 유월 십육일에 두 사람은 함께 맹세하고 기록한다. 하늘 앞에 맹세하기를, 지금부터 삼년 이후 충성의 도를 항상 지켜서 과실이 없기를 맹세한다. (壬申年六月六日に二人はともに誓いを記した。天の前で誓ったことを、今から三年後、忠誠の道を執持し、過失なきことを誓う)
- ②漢文：壬申年六月六日二人并誓記天前誓今自三年以後忠道執持過失无誓

壬申誓記石のこの文章は、漢字になっているが、韓国語の統辞構造を帯びており、擬國體と呼ばれたり、壬申誓記石に刻まれた文章が代表的事例であるため誓記體ともいわれたり<sup>21</sup>、漢文の韓国語式変形ということで、変体漢文ともいわれている<sup>22</sup>。普通の吏読文から韓国語文法素(助詞)が漢字の音と訓を借りて表記されているのとは違い、この変体漢文は、意味語だけ、漢字を韓国語式に羅列しているのが特徴である<sup>23</sup>。

韓国古代社会で完成された吏読文の姿を示している最初の資料と言われている「華嚴經寫經造成記」<sup>24</sup>の一つの句節を通して、吏読文の特徴を、以下もう少し詳しく見て見よう。造成記の吏読の原文と、韓国語の解釈は下記のようになっている。

- ①原文：諸筆師等各香華捧<sup>ㄱ</sup>右念行道爲作處中至者.....坐中昇經寫在如。(訳注：すべての筆師がそれぞれ香華を持ち添えて、右念行道し、作る処に至ると.....席に上がり經を写する)
- ②吐：諸 筆師等 各 香華 捧<sup>ㄱ</sup>右念行道爲 作 處中 至者.....坐中 昇 經 寫在如.
- ③韓国語解釈
- ③- 1 : 諸 筆師<sup>들</sup> 各 香華 받들어금 右念行道<sup>ㄱ</sup> 作 處<sup>ㄱ</sup> 中 至<sup>는</sup>.....坐 中 昇 經 寫<sup>다</sup> 在如.
- ③- 2 : 모든 筆師<sup>들</sup> 各 香華 받들어금 右念行道<sup>ㄱ</sup> 아 질 곧 中 昇 經 寫<sup>다</sup> 在如. ....자리<sup>ㄱ</sup> 中 昇 經 寫<sup>다</sup> 在如.
- ③- 3 : 모든 筆師들이 각각 香華를 받들고 右念行道<sup>ㄱ</sup> 여 만드<sup>는</sup> 는 곳 에 이르면.....자리<sup>ㄱ</sup> 에 올라 經을 쓴다.

21 前掲ユ・ミョンウ論文、72頁参照。

22 キム・ハス(김하수)、イ・ジョンギョン(이전경)『韓国の諸文字』コミュニケーションブックス、2015年、1-9頁参照。

23 前掲ユ・ミョンウ論文、73頁参照。

24 前掲張允熙論文、50頁の脚注2、参照。

①に見られるように、吏読文は、漢文の形をとってはいるが、漢字を韓国語の語順に合わせて並べ、文章を構成する変体漢文の形態を帯びている。吏読文の①を、漢文の語順や文章構造に合わせて直して見ると、大体「諸筆師、各捧香華、右念行道、至作處……昇坐寫經」くらいになろう。このように吏読文は、漢字の語順や文章構造に従わない、韓国語式の漢文である。そして吏読文は、孤立語である中国語には存在せず、添加語である韓国語には存在する助字や語尾を表記するために、漢字の音や訓を一部分活用しているのが特徴である。

## 2) 郷札

郷札は、漢字の音と訓を活用し、韓国語を全部表記する方法である<sup>25</sup>。「郷札」という用語が初めて登場したのは、10世紀後半に翰林学士崔行歸が、均如(923-973)の『普賢十願歌』を漢詩に翻訳してから書いた序文(967年、高麗光宗18)である<sup>26</sup>。序文の関連した内容を見ると、次のようになっている。

気の毒なことは、我が国の才子、名公は、唐什(唐の詩歌、漢詩)を口ずさむが、その土地の鴻儒、碩徳は郷謠を知らないことだ。また、唐文は帝釈天宮の垂珠網が、互いに照らしあわせて並んだようで、我が国では分かりやすいが、郷札は梵字を次々と並べたようで、その土地(中国)では解説できない。……これは薛翰林(薛聡)が斯文(漢文)を強いて(郷札に)変えたが、結果的には鼠の尻尾のようなくだららないものを作ってしまった、中国と韓国の間の言葉の壁をもたらしただけではないか<sup>27</sup>。(括弧内は訳注)

崔行歸の序文は郷謠(歌謠)と郷札(文)を唐什(漢詩)に対比させている。この時の郷札は吏読を含み、我が国の巷で使われている借字表記法を包括して指していると言い得る<sup>28</sup>。このような借字表記法(つまり郷札)を活用し、口伝されてきた我々の古い歌を、全部文字化したものが、慧星歌、讃耆婆郎歌、

25 前掲南豊鉉『口訣研究』14頁。

26 この序文は、高麗前期の有名な文章家である赫連挺が、1074年4月から1075年(文宗29)1月まで書いた『均如傳』の第8章「譯歌現徳分」に漢訳された「普賢十願歌」とともに掲載されている。

27 前掲安秉禧論文、13頁から重引。(訳注：原文は「薛翰林強變於斯文煩成鼠尾之所致者歟」)

28 前掲安秉禧論文、13頁。



祭亡妹歌、禱千手觀音歌、安民歌、兜率歌などの郷歌である。このように郷札は主に郷歌の文字化に使われ、借字表記法を意味する用語として使われてきた。

處容歌の最初の句節を通して、郷歌の記録に使われた郷札の表記法上の特徴を見ると、つぎのようになる。

- ①原文：東京明期月良夜入伊遊行如可（訳注：ソウルの明るい月夜に夜遅くまで遊んでいて）
- ②吐：東京 明期 月良 夜 入伊 遊行如可（\*下線部が、假字になっている吐）
- ③韓国語解釈：東京 明기 月아 夜 入이 遊行다가  
東京 불기 돌아 밤 들이 놀니다가

①が郷札に表記された郷歌「處容歌」の最初の句節で、ここで仮字になっている吐を見つけ、区切って読んだものが②で、これを韓国語に移したものが③である。②を見ると、郷札の基本表記構造は、吏読のように「読字（表意字）＋仮字（表音字）」である。しかし前の吏読文が意味を表示する語彙部は、もともとの意味を維持した漢字や漢文を書き、文法関係を表示する形態部のみ、借字で表記したのとは異なり、郷札は文章全体を借字で表記していた。従って、吏読が韓国語を一部分のみ表記した借字表記法だったとしたら、郷札は韓国語全体を表記する最も完成された借字表記法だということができる<sup>29</sup>。

### 3) 口訣

口訣は「口授秘訣／口授伝訣」の略語か<sup>30</sup>、韓国語の「입결」または「입것」の漢訳だと言われている。口訣は、よく「吐」<sup>31</sup>として理解されてもいるが、この「吐」は孤立語である中国語に土台を置いた漢文を、韓国語に解釈して読むため、漢文の句読処に付加した韓国語助詞や、語尾である<sup>32</sup>。一部では、口訣を「吐」と同一視しているが、口訣は漢文に「吐」を付し、韓国語式に読む方法だという点で、「吐」とは区別する必要がある<sup>33</sup>。

29 張允熙「釈読口訣およびその資料の概要」口訣学会『口訣研究』第12集、2004年、51頁。

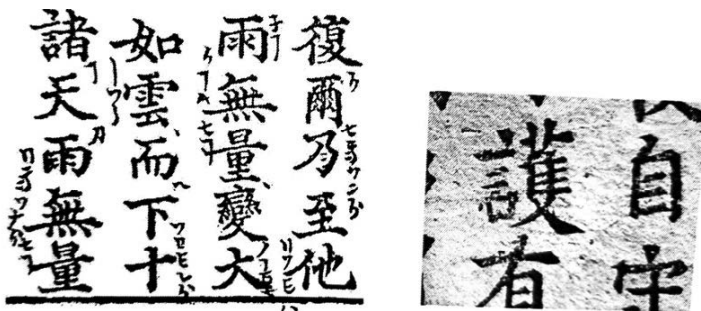
30 前掲南豊鉉『口訣研究』15頁。

31 「吐」は句読の「読」を音仮したものと思われる。前掲南豊鉉『口訣研究』16頁。

32 記入用の道具としては、尖った筆記具の角筆と、我々がよく筆と呼んでいる毛筆が、主に使われた。

33 前掲南豊鉉『口訣研究』14頁。漢文に「吐」を付したことが、口訣になるということである。

漢文読法としての口訣は、そのやり方によって、大きく順読口訣と、釈読口訣の二つに分けられる<sup>34</sup>。漢文の語順をそのままにしておいて、その句読処に韓国語助詞や語尾のような機能語を付加し、順に読むのが順読口訣で、韓国語の語順に従い、漢文を逆読、つまり遡って読んだりしながら、原文の漢字を意味で読み解くのが釈読口訣である。我々になじみがあるのは、高麗末、朝鮮初期以後普遍化し、今まで漢文学習に活用されている順読口訣で、「子」曰學而時習之且不亦説乎や」（下線部分が「吐」）のような形をとる<sup>35</sup>。学界でも韓国語の口訣は、このような順読口訣のみがあったという認識だったが、1973年に前述した『旧訳仁王經』5枚が発見され、また、別の形の口訣、つまり「釈読口訣」の存在が初めて確認された。順読口訣（または音読口訣）が漢文原文の語順をそのままにして、その漢文を韓国語に移す時の文章成分、文法関係、文章類型などを一部表示するのと比べ、釈読口訣は漢文原文を完全に韓国語文章に近づけて解釈するだけでなく、漢字をどのように解釈すべきかも表示する<sup>36</sup>。『旧訳仁王經』（13世紀半ば以降）で初めて確認されて以来、『釋華嚴教分記』（10世紀中葉）、『大方廣佛華嚴經疏』（12世紀初頭）、『合部金光明經』（13世紀半ば以降）、『瑜伽師地論』（13世紀末）<sup>37</sup>などの釈読口訣資料が確認さ



【図2】字吐（左）と点吐（右）釈読口訣

34 前掲南豊鉉『口訣研究』16頁。

35 漢文の原文を漢字の音でのみ読んで、「音読口訣」ということもある。前掲張允熙論文、52頁。

36 前掲張允熙論文、53頁。

37 張景俊「高麗時代釈読口訣資料の紹介と活用方案」韓国語学会『韓国語学』59、2013年、3-4頁、参照。

れた<sup>38</sup>。

一方、釈読口訣は記入の内容に従って、さらに字吐釈読口訣と、点吐釈読口訣に分けられる。『旧訳仁王經』のように、漢文テキストの左右の行間に、主に文字（つまり、口訣字）が記入され、そこに解釈の順序を表示する逆読点<sup>39</sup>が追加されたものが、字吐釈読口訣である。このような文字で「吐」を付する形の釈読口訣がまず知られていたが、後、文字ではない点や線の形の記号を特定の位置に書き入れる、全く新しい種類の釈読口訣が発見された。このことを既存の字吐釈読口訣と区別し、点吐釈読口訣、または符号釈読口訣と呼ぶ<sup>39</sup>。点吐は日本の「をこと点」と似ており、漢字の周辺（文字内部）に点や線、または点と線を組み合わせ、その位置と形によって、韓国語の助詞や動詞語尾を表す符号である。点吐の解説には、漢字周辺と文字内部にわたって、点吐の位置を数値化する方法が使われ、高麗時代仏教の様々な用例を帰納した結果によって作成された点図の一つを次に示す<sup>40</sup>。

11	12	13	14	15
21	22	23	24	25
31	32	33	34	35
41	42	43	44	45
51	52	53	54	55

【図3】点吐位置の数値化配置図

図の中の太い線に囲まれている漢字があり、その漢字の中と周辺の特定の位置に点吐が記入され、韓国語助詞や語尾を表している。例えば15番の位置にある点は口（고）を意味し、34番の位置に点を付けると乙（을, 를）を意味して、

38 前掲張允熙論文、参照。

39 前掲張景俊論文、張景俊「釈読口訣と訓点：資料に用いられた符号の比較研究試論」口訣学会『口訣学会学術大会発表論文集』2012年、等参照。

40 前掲小林芳規『角筆の文化史』、232頁、参照。金星周「新羅点吐釈読口訣試探」倍達語学会『倍達語』53巻、2013年で、新羅の仏典に記入された点吐を帰納し、漢字を9等分した形の点図を提示している。

42番位置に付けた点は、ヒ (ㄱ) を意味するといったやり方である<sup>41</sup>。今まで発見された高麗時代の釈読口訣の資料を見ると、大体は点吐口訣資料のほうが、やや時期が先だっている<sup>42</sup>。

吏読や郷札と異なり、口訣は漢字を活用した韓国語表記法であると同時に、一つの文字としても機能した。「郷札字」や「吏読字」と言えるほどの別の文字体系があるわけではないが、口訣は韓国語語尾や助詞などを表記するための文字、つまり口訣字を作り出した。この口訣字は、記入の便宜上、漢字の楷書や草書の一部の画を省略した略体字を書く場合が多い<sup>43</sup>。先に見た崔行歸の序文で、郷札を「結果的には鼠の尻尾のようなくだらしないものを作った」などとしたことは、漢文原典に韓国語語尾や助詞を記録するため使われた略体字の形の口訣字を指摘したものと言える。また、崔行歸が郷札の姿が「梵書を次々と並べたよう」だと言うのも、漢字の画を省略したり、漢字を思い切って解体して作り出した独特の文字である口訣字<sup>44</sup>を形象化したものと見ることができる。実際、大部分の口訣字は、漢字の画を思い切って省略するやり方で作り出した。この時にも、音や意味の中の一つに沿って作ったり、音と意味を合体した文字を作ったが、例えば、主格助詞を表記するため、漢字「隱」の音を利用するが、果敢に画を省略し、左偏の「阝」を基にして「ㄹ」という口訣字が作られ、「은／는／ㄹ」を表記するのに使われた。意味に従って作る場合には「する」は、その意味の「爲」から頭の部分の画をもとに「ㅇ」という口訣字が作られ、「す」(하) る、つまり、「～して (하고)、～すると (하니)、～せり (하니라)、～せよ (하야)」などの「す」(하) を表記する時に使われた。

口訣が発展する過程で誕生した口訣字は、我が国文字史と教育史の側面で、大変重要な意味を持っている。日本の場合、8世紀に成立した『万葉集』で最初に日本語を漢字で表記する方法、つまり万葉仮名が作られた。漢文を日本語で読むためには、日本語の助詞と助動詞、活用語尾を漢字の横にこの万葉仮名で書かねばならなかったが、万葉仮名は画数も多く、書き込む行間も狭く、時

41 前掲小林芳規『角筆の文化史』232-235頁、参照。

42 前掲張景俊論文等に従えば、点吐釈読口訣は、主に10-12世紀に記入されたものが多く、字吐釈読口訣は、主に12-13世紀に記入されたものが多い。

43 前掲張允熙論文、52頁。

44 前掲キム・ハス、イ・ジョンギョン『韓国の諸文字』参照。この本では、訓民正音という我が固有の文字が生まれる以前にも、我が祖先たちは変体漢文、吏読、郷札、口訣、点吐口訣、漢字等の「文字」を使ってきたことを強調している。

間もかなりかかるという問題があった。それゆえ、万葉仮名の一部分だけを取り出した片仮名が作られ<sup>45</sup>、万葉仮名の代わりに使われた<sup>46</sup>。また、万葉仮名の字形を草書体で書いてできた草仮名を、さらに曲線化・単純化して、平仮名が生まれた<sup>47</sup>。これが今まで続き、日本の基本文字として活用されている。我が国の場合、記入の便宜性のため、漢字の画を思い切って省略し、字形を解体した口訣字が作られ、釈読口訣の表記に活用された。口訣字は訓民正音が創製される前まで、韓国語文法素や語助詞を表記する手段として使われたが、それなりの有用性にもかかわらず、借字表記が持っている不便と限界は避けられなかった。この不便と限界を超える我々の真正な文字として創製されたのが訓民正音である。結局口訣字は、訓民正音という、より便利で体系を備えた文字創製の動機として作用したのである<sup>48</sup>。現在我々が使っているハングルという教育の基本文字は、世宗の代に創製されたものであるが、借字表記法が作られ始めた古代から、ハングル創製を可能にした根本的な動力は、既に形成されていたものと見ることができる。

一方、口訣は漢文を韓国語に解釈して読む方法を、字吐か点吐のように原典に様々なやり方で表記したものであって、漢文原典と不可分であるという面においても、吏読、郷札とは違った特徴を持っている。例えば郷札は、主に我々の昔の歌謡を漢字の音と訓を借りて表記するのに使われていた。口伝されていた我々の歌謡を独特なやり方で文字化したのが郷札というものである。そして吏読は、漢文で書かれていた公文書や実用文書において、文章の意味をより明確にする目的で、韓国語の語助詞を付け加えるのに主に使われた。朝鮮初期の『大明律直解』のように、時には吏読も漢文原典を翻訳するのに活用された。しかし吏読文翻訳は、翻訳対象である元来のテキストと分離したまま、独立して成立することができるという点で、翻訳対象と分離することができない口訣とは異なっている。

45 片仮名は、文字通り、不完全な文字という意味を持っている。この片仮名は「韓国語の口訣字をそのまま移したものだ」という主張もある。前掲李基文論文、242頁、参照。

46 片仮名と対比して、万葉仮名は真仮名と言う。

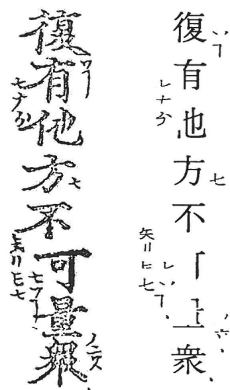
47 イ・サンウン (이상운)、イム・ヨンチョル (임영철) 「日本の文字規範化と表記法の変遷」 ヨン・ギュドン (연구동) 他『東西洋文字の成立と規範化』2014年、102-111頁、参照。

48 以上、口訣の意味については、前掲キム・ハス、イ・ジョンギョン『韓国の諸文字』51-53頁、参照。

## 2. 釈読口訣の原理と形態

### 1) 『旧訳仁王経』の釈読口訣

現在伝わっている文献がないために、薛聡が体系化した釈読口訣の詳細な形態を直接確認することはできない。しかし、前述した『三国史記』でも「今でも学者たちがそれを模範にする」とし、『三国遺事』でも「今でも我が国で明経を生業とする者が伝えてやまない」とすることに着目して、現存している高麗時代の仏教の釈読口訣を通して、間接的に確認するやり方で薛聡の釈読口訣について、その具体的な姿を推定することができる<sup>49</sup>。



【図4】釈読口訣例示

1973年、前述『旧訳仁王経』5枚が発見される前まで、我が国には漢文の語順をそのままにして、「吐」を付ける順読、または音読口訣だけが知られていた。しかし『旧訳仁王経』を通して、他のやり方の口訣、つまり釈読口訣の存在が確認された。【図4】<sup>50</sup>に示されているように、釈読口訣は仏教の原文の左右に、小さな文字で「吐」を書き込むやり方で付け加えている。そして原文の漢字の左右に所々点をうち、漢字の解釈の順序を示している。このように漢文にされた原文の左右に付け加わった小さな文字の「吐」と、合間合間に付けられた点によって、漢文を韓国語に解釈して読んでいくことになる。【図4】の

49 以下の内容は、前掲南豊鉉論文、24-28頁の内容を中心に整理したものである。

50 前掲南豊鉉論文、25頁より転載。



「復有他方不可量衆」という『旧訳仁王経』の一句を例にすれば、まず行の右側に「吐」が付けられている漢字の「復ッ1、他方セ、量ノㄱ」を、「吐」とともに読む。そして「量ノㄱ」の最後に点が付けられていて、上に遡って行の左側の「吐」が付けられている一番下の文字「可セッ1」を「吐」とともに読む。この「吐」の最後に、もう一度点が付けられていて、上に遡り、行の左側に「吐」が付けられている漢字「不失リヒセ」を「吐」とともに読む。ここには、点がないので、もう一度下に降りて、「衆」を読み、この漢字の右側に点が付けられているので、上に遡り、左側に「吐」が付けられている「有セナク」を「吐」とともに読む。以上の内容を基にして、釈読口訣の過程をもう一度整理して見ると、次のようになる。

- ①原文：復有他方不可量衆（また、他方の量をはかりがたい衆がいるが）
- ②釈読口訣：復ッ1 他方セ 量ノㄱ 可セッ1 不失リヒセ 衆 有セナク  
 (\*下線部は略体字口訣)  
 復為隱 他方叱 量乎音 可叱爲隱 不知是飛叱 衆 有叱在於  
 (\*略体字口訣の正字変化)
- ③ハングル口訣：復ᄃ 他人ᄃ 量ᄃ 可ᄃ이ᄃ 衆 有ᄃ거머
- ④ハングル翻訳：또한 他方の 量함직하지 않은 衆이 있으며

以上に見たように、①の漢文の原文につけた左右の「吐」と点に従い、原文を韓国語の順序にそつてもう一度配列すると、②のようになる。つまり②の釈読口訣は、漢文の原文を解体し、韓国語の語順にそつて解釈して読むことができるように再度配列したものである<sup>51</sup>。このようにすると、③、④のような韓国語翻訳が可能になる。

もちろん12世紀の資料と推定された<sup>52</sup>『旧訳仁王経』の釈読口訣は、薛聡の釈読口訣と400年余り離れているので、両者が同じ系統だとか同じ形態だとかいうことを断定することは難しい。しかしながら、両者がほとんど同じ原理に

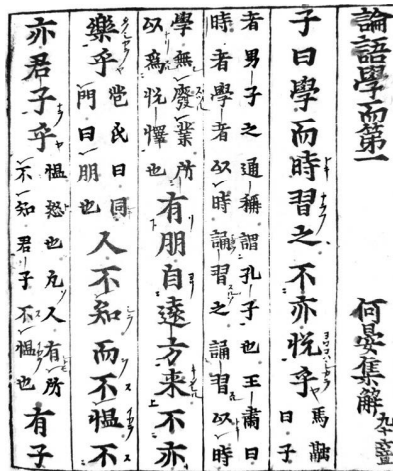
51 ②の下線部を引いた「吐」を通して、口訣字は主に略体字で原文の行間の左右に表記されるが、いつでも正字に変換しうることがわかる。口訣は、印刷したり、公式に公開したりする時は、略体字を正字に戻すことが原則だったという。前掲南豊鉉（2001）論文、24頁、参照。

52 南豊鉉『口訣研究』太学社、1999年、139-166頁の「Ⅱ.『旧訳仁王経』釈読口訣の年代」参照。

基づいていたことは、薛聡の活動年代と近い時代に作られた日本の訓点資料を通して推定することができる。

## 2) 日本にある新羅仏教訓点資料

日本では、我が国の釈読口訣と類似したやり方で、漢文の意味を日本語に解釈して読む方法を、訓読という。日本の漢文訓読は、大体8世紀ころ始まり<sup>53</sup>、現代学校の漢文教育でも依然として活用されている。日本で漢文の内容を理解し、その結果を日本語に表すため、漢文の字間と行間に記入する文字や符号を総称する用語が訓点である<sup>54</sup>。我が国の口訣研究が1973年に発見された『旧訳仁王経』を契機として本格化した一方、日本では、1909年に大矢透が『仮名遣及仮名字体沿革史料』を刊行し、訓点資料研究が始まった<sup>55</sup>。



【図5】日本の訓点の例示<sup>56</sup>

53 前掲キム・ハス、イ・ジョンギョン『韓国の諸文字』43-44頁によれば、表員という人物が華嚴学の講義の要旨を書いた『華嚴文意要訣』筆写本が、奈良東大寺で発見されたが、この資料に書かれた多くの符号の解釈の仕方、およびいくつかの口訣字が韓国語と一致し、それが新羅の資料や、新羅の資料を筆写したものであり、『華嚴文意要訣』の作者・表員も義相の弟子である表訓と同一人物であると推定されている。このような点に基づいて見ると、日本の古代社会の漢文訓読は、新羅の口訣を取り入れたものであると見ることができる。

訓点の基本的な形態は、句読点で句と節を分けて読み方を指示する<sup>57</sup>。日本の漢文訓読は、我が国の釈読口訣と同じように、一種の翻訳であるが、翻訳の対象である漢文原文と分離されていない点が、一般の翻訳と異なっている<sup>58</sup>。漢文書籍に直接訓点を書いておき、それを見ながら訓点に従って読み下していけば、日本語の文章が成立するということである。しかし、興味深い点は、日本の訓点の源流が、8世紀の新羅である可能性が高いという点である<sup>59</sup>。もし日本古代の訓点と新羅の関連性が明らかになれば、現存する古代日本の訓点資料を通して、薛聡当時、つまり8世紀前後、新羅から体系化された釈読口訣の原理と形態に、もっと近づけるだろう。

新羅の高僧たち（元暁や義湘など）が著述し、8世紀ころ日本に流入して、現在まで伝えられている仏典のうち、当時の訓点が入記されているものとしては、以下のいくつかが挙げられる。東大寺正倉院文書に含まれている『大方廣佛華嚴』（12巻～20巻、合巻1巻）と、その他の場所にある元暁の「判比量論」（大谷大学所蔵）、表員の『華嚴文義要決』（延暦寺所蔵）、憬興の『彌勒經疏』

54 吳美寧「日本の『論語』受容と訓読」『中国語論域叢刊』第23集、2008年、27頁。

55 月本雅幸「日本仏典訓点資料研究の最先端」『口訣研究』第38集、2017年、28頁。

56 吳美寧他、漢文訓読研究会『日本論語訓点本の解釈と翻訳—日本東洋文庫所蔵『論語集解』を対象に』（上）、崇実大学校出版局、2014年の「日本東洋文庫所蔵訓点本『論語集解』原本写真」中、一部を転載。

57 日本では、8世紀の資料である『華嚴刊定記』に初めて句読点が見れ、9世紀ころからは句点は漢字の右側の下に付け、読点は、中央の下に付けるというやり方が行われた。また、別の訓点は、語順指示符号つまり返り点として、中国語と日本語が統辞論上、大きな違いを見せる語順を変えるのに使われた。例えば「レ」は、一つの文字の下をまず読むことを指示する符号で、「一」「二」は、「二」が付けられている文字の下から読んでいき、「一」が付けられているところまで読んで、つぎにまた廻り、「二」が付けられている文字を読むという意味である。漢字の横に仮名で該当する漢字の読み方や活用形態、助詞および助動詞などを記入することは、「仮名点」と総称されている。この他にも、「をこと点」、音読符、訓読符、音合符、訓合符などの訓点がある。前掲吳美寧論文、29-33頁、参照。

58 前掲吳美寧論文、28頁。

59 藤本幸夫「李朝訓読攷其一『牧牛子修心訣』を中心に」『朝鮮学報』第143輯、1992年。この論文で藤本は、「8世紀の新羅儒学僧によって華嚴宗とともに漢文訓読法を持ち込んだ可能性」を提起した。小林芳規「日本訓点の源流」『口訣研究』第17集、2006年、同「日本語訓点表記の起源と展開過程—白点・朱点の始原を中心に」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院『韓国文化』42、2008年、などでも、日本の訓点の新羅起源説について論じられている。

(園城寺所蔵) などである<sup>60</sup>。

その中で、まず正倉院文書の『大方廣佛華嚴』に角筆で刻まれた訓点の例をいくつか見ると、全1141行中、第730行の「不起是法邪」という口訣の「是」に「叱」が角筆で書かれている。この「叱」は古代韓国語で所有格の助詞（日本語の「の」に該当する）として使われたりもするし、子音（s）で終わる単語の終声を表すのにも使われる<sup>61</sup>。そして第178行の「尔時殊師菩薩問目首菩薩言」という区節の「時」と「言」にそれぞれ「𐄂」と「𐄃」が加點されている。このうち「𐄂」は「良」の草書として、古代韓国語では場所などを表す副詞格助詞（日本語の「に」に該当する）として使われたり、活用語の連結語尾として使われたりもする<sup>62</sup>。「言」に書き入れられた「𐄃」は、本文の「言」の意味（言上する）を表すために加點されている。この他にも『大方廣佛華嚴』のあちこちに助詞と語尾、本文の漢字の音と訓を表示するために、多くの訓点が記入されている<sup>63</sup>。『大方廣佛華嚴』は書写した時期が8世紀中頃と見られ、經典の所々に角筆で書き込まれた訓点が、日本語ではなく、古代韓国語（新羅語）という点で<sup>64</sup>、薛聡当時の新羅の釈読口訣の姿とほとんど同じものと見ることができる。

次に、正倉院文書以外の新羅仏典の訓点資料を見て見ると、まず元曉の「判比量論」<sup>65</sup>には、本文と廻向偈に角筆で漢字と仮名および様々な符号が記入されている。角筆で書かれた漢字は、本文の漢字音を表す時に使われる注音の漢字と、本文の漢字句の釈義を表す漢字字句である<sup>66</sup>。「判比量論」には、日本語ではなく、韓国語（新羅語）が、仮名・準仮名で角筆書きされている例が、12ヶ所で確認され、漢字・仮名以外にも、様々な注の符号が角筆で記入されていることが確認される<sup>67</sup>。「判比量論」<sup>68</sup>の訓点の用例中、第9節26行の「今於

60 以下の内容は、前掲小林芳規論文（2006年）、前掲小林芳規『角筆の文化史』等を参考にして整理したものである。

61 前掲小林芳規『角筆の文化史』261頁。

62 前掲小林芳規『角筆の文化史』261-262頁。

63 小林芳規教授の単独調査（2003年）および日韓研究者の共同調査（2009年）によって明らかになった訓点のより詳しい内容については、前掲小林芳規『角筆の文化史』259-263頁、276-285頁、参照。

64 前掲小林芳規『角筆の文化史』263頁。

65 大谷大学図書館所蔵。

66 小林芳規「日本訓点の源流」『口訣研究』第17集、2006年、17頁。

67 前掲小林芳規論文、16-21頁。

此中直就所詮」の「中」に付けられている「弓」は、前の『大方廣佛華嚴』のように、古代韓国語の処所格助詞として使われている。そして第10節42行の「法處所撮不待根」の「根」に付けられている「火リ」は、「根」の意味である「プリ＝뿌리」という韓国語を表すために用いられる漢字「火（プル＝불）」と、利の一部を省いた字（リ）である<sup>69</sup>。

次に、表員の『華嚴文義要決』<sup>70</sup>には、全巻にわたって「をこと点」や様々な符号が黄褐色で記入されている。このような「をこと点」や符号は、日本の毛筆による古訓点には全く見られないものである<sup>71</sup>。結局『華嚴文義要決』の加点の方式は、「判比量論」と同じく、新羅と親密な関係にあり、符号も新羅の方式を受け継いだとすることができる。しかし訓読用語の場合、「判比量論」が新羅語をそのまま加点しているのに比べて、『華嚴文義要決』の「をこと点」については、新羅方式なのは漢字だけで、その言語は日本語でなされている。これを見ると、『華嚴文義要決』と「判比量論」の加点方式は、半世紀ほどの違いがあるということができる。この半世紀の違いに、日本で新羅の加点方式を受容した方法に、何らかの変化が起こったものと見られる<sup>72</sup>。

最後に、憬興の『彌勒經疏』<sup>73</sup>本文には、褐朱色の仮名・字音注と、「をこと点」が記入されていて、一部に白点の「をこと点」と一・二点などの返り点がある。褐朱色の仮名は、上巻に若干、下巻に一ヶ所記入されており、草書体で日本語の訓や助詞、助動詞を記入している。字体を通して見ると、『彌勒經疏』の加点は、大体9世紀末ごろに記入されたものと推定される<sup>74</sup>。

このように、日本に現存する新羅仏典の中で、当時の訓点が記入されている『大方廣佛華嚴』と元曉の「判比量論」、表員の『華嚴文義要決』、憬興の『彌勒經疏』は、日本の訓点が新羅の釈読口訣に起因しているものであることを示している。『大方廣佛華嚴』と「判比量論」の加点は、全て新羅方式を踏襲し、角筆で書かれた言語も新羅語である。『華嚴文義要決』の場合、訓読用語は日本語に変えられているが、符号は依然として新羅のものを使っていた。『彌勒

68 第7節から第14節の105行が現伝する。

69 以上は、前掲小林芳規『角筆の文化史』、267-268頁。

70 延暦寺所蔵。前掲小林芳規論文で分析した『華嚴文義要決』は、佐藤達次郎所蔵本。

71 前掲小林芳規論文、22頁。

72 前掲小林芳規論文、26頁。

73 園城寺（三井寺）所蔵。

74 以上は、前掲小林芳規論文、27頁。

經疏』の場合には、訓読用語や符号が日本式に変えられているが、一部の符号は依然として新羅方式に従っていた。こうした訓点資料は、それぞれ8世紀半ばより前、8世紀から9世紀初頭、9世紀のものであると推定されているが、こうして見ると、日本の訓点は当初、新羅のものを丸ごとそのまま受容し、次第に訓読用語が日本語に変えられ、符号の一部だけ新羅のものをを使うように変化してきたことが分かる<sup>75</sup>。

以上に見てきた8－9世紀日本の訓点資料は、薛聡が活動していた時期と近く、新羅との影響関係が明らかだけに、薛聡が漢文テキストを韓国語に解釈して読む方式を表記するために体系化した釈読口訣の原理と形態を推定する時、直接の助けになる。つまり、薛聡の釈読口訣が、韓国語の助詞や語尾を漢文の行間や漢字の周辺やその中に、口訣字または点で表記し、点やその他の符号を活用し、漢字の解釈方法と順序を表記するやり方で行われたと推定することを可能にしてくれる。このようにしてみると、薛聡の時代に行われた釈読口訣は、前の『旧訳仁王経』の事例で見た、高麗時代の釈読口訣と、その原理と形態の面で、大きな違いはなかったとすることができる。

### Ⅲ．薛聡の釈読口訣と韓国古代の儒学教育

先に釈読口訣は、韓国古代儒学教育の現場で漢文テキストを韓国語に解釈して教え、学び、それを文字化し、伝承しようとする努力の過程で体系化されたことを強調した。釈読口訣は、その目的が当初から教育にあり、実際に師匠と弟子が教え、学ぶ現場で広く活用されていたのである。この点は、我々の釈読口訣と似た日本の訓点資料によってもう一度明瞭に確認することができる。例えば、訓点資料は「講義が行われた空間で、師匠が読んだ訓読の結果を、弟子たちが素早く記入したもの」であり、これをもう少し細かく分類すると、次のようになる<sup>76</sup>。

#### 訓点資料分類案

- A：講義を聴講し、そこで記入されたもの（記入者は弟子）
- B：Aを草書にしたもの（記入者は弟子）
- C：講義の準備をするために記入したもの（記入者は師匠）

75 前掲小林芳規論文、37頁。

76 月本雅幸「日本仏典訓点資料研究の最先端」『口訣研究』第38集、2017年、30-31頁。



D：講義とは関係なく研究のため記入したもの

E：Dを転写（移点）したもの

F：伝授の過程で弟子が師匠から本を借りて転写（移点）したもの

この分類案の細部を見ると、記入した人や、記入時点、記入目的などで多少の違いがあるが、AからFまですべての訓点資料は、師匠と弟子の教え・学ぶ過程と関係なく作られるということはない。訓点資料は、中国から輸入された漢文の原典を、固有語で意味を解釈して読み、それを教え・学び、記録に残して伝えようとする努力の過程で作られたものである。仮に我が国で韓国古代の儒学教育と関連した釈読口訣資料が残っておらず、実体を確認することはできないが<sup>77</sup>、『三国史記』と『三国遺事』の関連する記録や、日本の訓点資料を通して、釈読口訣が本来教育の過程で、教育の目的を以て生まれ、教育の方法として広く活用されたものであると推測することができる。

先に強調したのと同じく、釈読口訣は漢文原典を韓国語に解釈し、読む方法であり、その表記法であって、それ自体が漢文原典の韓国語翻訳でもある。このことは、すなわち薛聡が当時の主要儒学教材の韓国語翻訳を完成したということの意味する。例えばこの時期、薛聡の翻訳は、一種の「借字翻訳」であり、訓民正音創製以後の「諺解翻訳」や、現代の「ハングル翻訳」とは<sup>78</sup>、比較できないほど不完全で不便なものだったと見ることができる。しかし、儒学の主要教材の韓国語翻訳の歴史において、薛聡が先駆の位置にあるという事実は、日本統治時代の1923年に行われた諺訳作業の担当者たちが残した、次のような文章を通してははっきりと確認することができる。

経書の口訣釈義は、新羅時代に薛聡が方言で『九経』を解釈したことが嚆矢となり、高麗末年に圃隱・鄭夢周先生と陽村・権近公がそれぞれ「吐」を付けて解釈し、世宗朝に訓民正音を定める新しい担当部署を設置して、儒臣に命じ、諺文で経書音解を撰させ、世祖朝にも口訣を定め、成宗朝に至って柳崇祖が命を受けて、七書諺解口讀を纂輯し、その後、様々な学者たちがそれぞれ著作し

77 現在、年代が確実で、最も時期が早い口訣資料は、『釋華嚴教分記』に出てくるもので、均如の講義をその門人たちが転写したものである。南豊鉉「薛聡と借字表記法」『新国語生活』第11巻第3号、2001年、33頁。

78 前掲ユ・ミョンウ論文、79-80頁。

て、退溪・李滉先生に至り釈義を合成したが、依然として完備していないので、宣祖9年、丙子（1576年）に栗谷・李珥先生に命じ、『四書』と『五経』の諺解を詳定させたが、栗谷・李珥先生が撰したのは『四書』に留まり、『五経』には至らなかったため、18年、乙酉（1585年）に再び担当部署を置いて、官に命じて諺解を著定させたが、今世に行う七書諺解がこれで、諺解といっても訓読だけ専主し、訓読も詳しく解釈できず、字解と義解には及ばなかった<sup>79</sup>。（下線は引用者による）

この文章を見ると、我が国に性理学が導入されて後、儒学教育の主な教材についての性理学の観点の韓国語解釈は、高麗末の鄭夢周（1337~1392）・權近（1352~1409）を始めとして、朝鮮前期の柳崇祖（1452~1512）などの学者を経て、朝鮮中期の李滉（1501~1570）・李珥（1536~1584）先生の代を経てようやく終わる。高麗末に鄭夢周・權近によって経書に口訣をつける作業が始まり、李滉・李珥によって釈義が整理され、続いて1585年、校正庁を設置して、官本『七書諺解』を完成することができたのである。このように、儒教経書を韓国語に解釈するのは、長い時間をかけて、多くの人々が参加する努力の過程を経てこそ可能な作業だ。性理学についての理解が成熟していなくては、諺解は不可能だったということであり、仮にテキスト理解の水準が高まったとしても、これを完全に表記する文字がなかったら、諺解は成立しえなかっただろう。かくして『三書三経』の諺解は、性理学導入以後、300余年かかって完結させることができた。ハングル創製以後、140年から160年に至る経書諺解過程は、朝鮮で朱子性理学についての研究が深化し、定着した過程であり、『七書諺解』は、高麗末以来、こつこつと進んできた性理学の観点からの経書解釈が、一段落したことを知らせるものだった<sup>80</sup>。校正庁本『七書諺解』は、刊行以後、中央だけでも10回余り重刊され、地方の刊本まであわせると、数えきれないほどの刊行がなされた<sup>81</sup>。これは『七書諺解』が朝鮮後期の儒学教育でかなりの重要性をもって広く活用されたことを示唆している<sup>82</sup>。

薛聡が『九経』に代表される訓詁・詞章学時代の主要な儒学教育教材の韓国

79 「論語諺譯序説」中「諺解の来歴」儒教經典講究所『儒教經典諺譯叢書：諺譯論語』（1923年）。

80 金恒洙「16世紀経書諺解の思想史的考察」『奎章閣』10、1987年。

81 李玲景「七書の諺解とその国語史的意義」『国学研究』19、2011年。

語解釈を完成した過程も、このような脈絡においてその意味を理解することができる。つまり、372年に高句麗の太学を最初に、我が国で儒教式の学校教育が本格化して以来、ほぼ300余年、薛聡の代に至って、韓・唐の訓詁・詞章学の主要な教材への韓国式の理解が本格的な軌道にのったと見ることができる<sup>83</sup>。薛聡以前に、訓詁・詞章学の発展に寄与した学者は、強首以外はほとんど知られていない。また、薛聡がどのような過程を経て、儒学に精通するようになったのかもよく分かっていない。『三国史記』には、「或る者は、薛聡がかつて唐の国へ留学したというが、その事の真偽は分からない」<sup>84</sup>とされているが、唐の国へ留学した可能性もある。ともかく薛聡は、何らかの過程を経て、訓詁・詞章学時代の儒学の主要教材に精通するようになった。しかし、儒学に対する薛聡の理解がいかに高い水準に到達していたとしても、これを文字化しうる表記手段が存在していなかったら、儒学教材の薛聡の韓国語解釈は後代まで伝承されることはなく、ある時点で死蔵されてしまっただろう。幸いにも薛聡が活動していた時期には、以前から発達してきた借字表記法がかなりの水準に到達していた。訓詁・詞章学という性格の儒学に対する薛聡の成熟した理解と、借字表記法という文字化手段の確保を通して、薛聡は九經と文学に代表される儒学教材に対する韓国語解釈、つまり釈読口訣を完成させ、薛聡によって最初に成し遂げられた韓国語解釈は、高麗末、性理学という新しい儒学が導入される前まで、教育の現場で師匠と弟子が教え・学ぶ標準の内容として伝えられた。

主要な儒学教材への薛聡の釈読口訣が新羅社会の標準的な教育内容として定着するには、薛聡が国学の教授として活動したことも<sup>85</sup>、重要な影響を与えた

82 参考までに、1689年に李萬敷が作成した朝鮮時代成均館の学事運営に関する規定集である『太学成典』第4巻の「書冊」項目には「『周易』諺解五件、『詩傳』諺解貳件内〔不扶肆卷〕、『詩傳』諺解貳件、『孝經』諺解貳卷、『論語』諺解陸件内〔不扶肆卷〕、『大學』諺解陸件、『中庸』諺解陸件、『孟子』諺解伍件内〔不扶玖卷〕、『小學』諺解肆卷」などの諺解史が列挙されている。これは、成均館の儒学教育に『小学』と『孝經』そして四書三經の諺解書が活用されたことを示している。『太学成典』については、崔光晩「『太学成典』の作成経緯と史料的价值」教育史学会『教育史学研究』第24集、第1号、2014年、参照。

83 唐の太宗が顔師古に經文の統一を、孔穎達に經典の意味を統一することを命じ、それぞれ『安氏定本』と『五經正義』を完成して、それが標準の經典として通用する事実を思い浮かべると、薛聡の經書釈読口訣は、この二種の本を底本にした可能性が高い。前掲南豊鉉論文、参照。

84 『三国史記』第46巻、第6に「或云、薛聡嘗入唐學、未知然不」とある。

ようだ。彼が主要な儒学教材への釈読口訣をつけたこと自体が、国学での教育を目的としていた可能性も高い。たとえ彼が国学の教授として、国学で直接自身の釈読口訣を通して国学生たちを教育していなかったとしても、薛聡の釈読口訣が高麗末に性理学が導入される前まで、新羅と高麗社会の標準的な教育内容として通用していたことは、『三国史記』で「今でも学者たちが彼を模範とする」とし、『三国遺事』でも「今でも我が国で明経を業とする者たちが伝えてやまない」と言ったことから、はっきり確認できる。

一方、薛聡の釈読口訣は、新羅の読書三品出身科（788年）や高麗の科举（958年）と同じ人材選抜制度で取士の標準として活用された可能性が高い。朝鮮時代に儒教経書に付した口訣と釈義が累代にわたって継続して行われ、官本『七書諺解』が完成して後、これを科举講経試験の標準にするよう法典に明文化した点<sup>86</sup>を想起する時、薛聡の釈読口訣も、新羅と高麗社会でこれと同様に活用された可能性が高い。朝鮮時代の場合を例にとると、科举の講経または講書試験で最も基本となったのは、句読と訓釈である<sup>87</sup>。四書三経の原文をうまく区切って読み、字句の意味を韓国語へ正確に解釈できるかどうかを、まず最初に見るのである。正確で明確な句読と訓釈の基礎の上に、講論や弁説へ進んでいくのであって、句読と訓釈を差し置いて、講論や弁説へ、すぐに躡等することはできない。新羅の読書三品科や高麗の科举で、経書学習を評価するときも同様だったものとして行うことができる。こうしてみると、薛聡の釈読口訣は、新羅の読書三品科で読書の程度を評価する時や、高麗の科举の明経業で、応試者たちが句読と訓釈の正確さを評価される時、その基準として用いられた可能性が高い。前述した『三国史記』と『三国遺事』の記事は、このような可能性を裏付ける有力な証拠である。

要するに、薛聡は、韓・唐儒学、つまり訓詁・詞章学の時代に、我が国の儒学および儒学教育の発展に大きく寄与した儒学者であり、彼が儒学の主要テキストを韓国語に解釈する方法を創案したことは、性理学導入以後、朝鮮時代に

85 前掲南豊鉉論文、24頁。

86 『大典会通』第3巻「礼典」に「式年文科覆試－講書：初場、四書三経〔願講餘二経及子史者、聴。經書外臨文。〔續〕初場、四書三経背誦○願講春秋者、聴。周易春秋、倍割。○諺解從舊解〕（以下略）とある。

87 『大典会通』第3巻「礼典」に「諸科－講書：句讀訓釋皆不差誤、講論雖未該通、不失一章大旨者爲粗。句讀訓釋皆分明、雖通大旨、未至融貫者爲略。句讀訓釋皆精熟、融貫旨趣、辨說無疑者爲通」とある。

校正庁で『四書三経』を諺解したことに匹敵する功績だと評価するに値する<sup>88</sup>。性理学の時代に、経書を韓国語に解釈し、性理学を朝鮮化する面において、最も大きく寄与した学者が、退溪・李滉と栗谷・李珣だとすれば、訓詁・詞章学の時代に、韓・唐の儒学の主要テキストを解得するのに、一番大きく寄与した学者が薛聡だったということである<sup>89</sup>。このような点を考慮する時、薛聡が1022年に弘儒侯に追封されて、文廟に従享されたことは、韓国古代から高麗時代まで、儒学および儒学教育の発展に寄与した彼の功に対する正当な評価の結果だったといえる。彼に追封された弘儒侯という諡号は、一方では巨儒や鴻儒という意味も持っているが、他方では、釈読口訣の完成を通して、儒学および儒学教育を弘揚したという意味もあるものと見ることができる。

#### IV. 結語

今まで見てきたように、『三国史記』で「方言で九経を読み、後生を教えたが、今でも学者たちが彼を模範にしている」とし、『三国遺事』で「方言で……六経と文学の意味を解釈し、今でも我が国で明経を業とする者たちが伝えてやまない」と称賛した薛聡の業績は、結局訓詁・詞章学時代、儒教の主要テキストに対する薛聡の韓国語解釈、つまり釈読口訣に要約される。よく薛聡は韓国古代社会で発達した代表的な借字表記法である吏読の創始者として知られてきたが、韓国教育史分野で、より注目されてきたのは、儒教教材に対する薛聡の釈読口訣である。先に考察したのと同じく、吏読は主に公文書の意味を明確にするため漢文の句読処に、韓国語文法素を挿入した韓国式の変体漢文を意味し、郷札は、我々の昔の歌を漢字の音と訓を活用して記録する方法だった。これに比べて、釈読口訣は、漢文テキストの行間、漢字の中や周辺に、字吐や点吐の形で韓国語の語尾や助詞に該当する「吐」を記入して、点と線などのさまざまな符号を活用し、漢文解釈の方法と順序を表示するものである。これは、事実上、儒学教材の韓国語翻訳の役割をしており、その過程で、口訣字という固有の文字体系も発達させた。現在、薛聡当代に行われた釈読口訣資料は伝わっていないが、8-9世紀日本の新羅仏典の訓点資料と高麗時代の仏教の釈読口訣資料を通して、薛聡当代に行われた釈読口訣の原理と形をある程度推定することができる。

88 金恒洙「新羅儒学と薛聡の学問」『新国語生活』第11巻第3号、2001年、77頁。

89 前掲金恒洙論文、66頁。



要するに、薛聡は、韓・唐儒学、つまり訓詁・詞章学の時代に中国から輸入した主要儒学教材の韓国語解釈を通して、韓国古代社会の儒学および儒学教材の発展に大きく寄与した人物である。彼が漢文原典の韓国語解釈の方法として体系化させた釈読口訣は、日本の漢文訓読方法にも大きく影響を与えた。また、薛聡の釈読口訣は、高麗末、性理学が導入されるまで、儒学の主要教材の標準解釈として尊重されてきた。そして、後代の慣例に照らしてみると、彼の經典解釈（句読と訓釈）は、読書三品科と科举など、新羅と高麗の人材選抜過程でも、講書や明經の標準として活用された可能性が大きい。このように、薛聡の釈読口訣は韓国古代社会の儒学教育と人材選抜過程の全てで最も基本的であり、かつ重要な意味を持っていたといえることができる。こうした点で、韓国教育史研究と叙述の面において、薛聡の釈読口訣は不可欠の重要な位置を占めていたと言い得る。

儒学教材への韓国語解釈は、大まかには口訣と釈義、諺解という過程を経た。『三国史記』と『三国遺事』に記録されたように、薛聡は儒学の主要教材に対する最初の韓国語解釈を完成させ、彼の韓国語解釈は、高麗後期まで伝えられた。かりに訓詁・詞章学の枠の中で行われた韓国語解釈という限界があったとしても、儒学教材の薛聡の韓国語解釈は、かなりの間、一つの有力な学説として存在し、儒学および儒学教育の発展の礎となった。高麗末、性理学導入とともに、鄭夢周（1337-1392）と權近（1352-1409）などが指導した新しい口訣は、儒学教材に対するより進んだ理解を可能にし、柳崇祖（1452-1512）を始めとする朝鮮前期のさまざまな学者たちによって行われた口訣作業もまた、その延長線上にあったといえることができる。このように薛聡の釈読口訣以来続いてきた儒学教材の韓国語解釈は、退溪・李滉（1501-1570）の『四書三經釈義』つまり『四書三經』の主要句節への韓国語解釈と、栗谷・李珥（1536-1584）の『四書釈義』および『四書諺解』に至る、新しい段階に進んでいった。これをもとに、儒学教材に対する性理学の観点の韓国語解釈結果とも言い得る校正序本『四書三經諺解』が完成したのである。校正序本『四書三經諺解』が出るまで、ほぼ千年に近い長い道のりで、薛聡の釈読口訣は、その先駆的な役割を果たしたと言い得る。



## 参考文献

- 『東文選』（韓国古典翻訳院 韓国古典総合データベース（<http://db.itkc.or.kr/>））
- 『太學成典』
- 『大典會通』（民俗院、2002年。影印本）
- 『四書釋義』（弘文閣、2005年。影印本）
- 『三經釋義』（国立中央図書館：일산古1230-14）
- 『四書釋義』（李珥釋義、国立中央図書館：의산古1237-16）
- 『四書栗谷諺解』（成均館大学校養賢齋、1973年。影印本）
- 『四書諺解』（古典影印七書諺解、経文社、1982年）
- 『三經諺解』（古典影印七書諺解、経文社、1983年）
- 『儒教經典諺譯叢書』（儒教經典講究所、1923年）
- 金星周「新羅吐訖讀口訣試探」ベダルマル学会『ベダルマル』53巻、2013年。
- 金永旭「古代韓国木簡に見る釋讀表記について」韓国木簡学会学術大会、2007年。
- キム・ハス、イ・ジョンギョン『韓国の諸文字』コミュニケーションブックス、2015年。
- 金恒洙「16世紀經書諺解の思想史的考察」『奎章閣』10、1987年。
- 金恒洙「新羅儒学と薛聡の学問」『新国語生活』第11巻第3号、2001年。
- 南豊鉉『口訣研究』太学社、1999年。
- 南豊鉉「薛聡と借字表記法」『新国語生活』第11巻第3号、2001年。
- 南豊鉉「『三国史記』と『三国遺事』に現れた薛聡関連記事の分析」韓国語文教育学会『語文研究』29巻4号、2001年。
- 朴鐘培「東アジア教育圏の形成と展開：普遍文化の受容と主体的変容を中心に」韓国教育史学会『民族・世界市民・教育：交流の歴史』（2017年度韓国教育史学会年次学術大会資料集）2017年。
- 朴鐘培「薛聡の釋讀口訣と韓国古代儒学教育の革新」2018年韓国教育史学会年次学術大会『融複合時代の公教育革新』session 16、韓国教育史学会発表論文。
- 安京植「新羅国学の「地域化」過程研究」韓国教育史学会『韓国教育史学』第38巻第4号、2016年。
- 安秉禧「薛聡と国語」『新国語生活』第11巻第3号、2001年。
- 吳美寧「日本の『論語』受容と訓讀」『中国語文論叢刊』第23集、2008年。
- 吳美寧他、漢文訓読研究会『日本論語訓点本の解説と翻訳：日本東洋文庫所蔵『論語集解』を対象に』（上）崇実大学校出版局、2014年。
- ユ・ミョンウ「韓国翻訳史から見る朝鮮朝諺解翻訳」韓国翻訳学会『翻訳研究』第5巻第2号、2004年。
- 尹善泰「木簡に見る漢字文化の受容と併用」『新羅文化』第32集、2008年。
- 李康來記『三国史記』（金富軾）ハンギル、1998年。
- 李家源、許敬震『三国遺事』（一然）ハンギル、2006年。
- 李基文「我が国の文字史の流れ」口訣学会『口訣研究』第14集、2005年。
- 李玲景「七書の諺解とその国語史的意義」『国学研究』19、2011年。
- 張景俊「釋讀口訣と訓點：資料に用いられた符号の比較研究試論」口訣学会『口訣学会学術大会発表論文集』2012年。

- 張景俊「高麗時代硃読口訣資料の紹介と活用方案」韓国語学会『韓国語学』59、2013年。  
チャン・セギョン『吏読資料読解事典』漢陽大学校出版部、2001年。  
張允熙「硃読口訣およびその資料の概要」口訣学会『口訣研究』第12集、2004年。  
崔光晩「『太学成典』の作成経緯と資料的価値」教育史学会『教育史学研究』第24集第1号、2014年。  
月本雅幸「日本仏典訓点資料研究の最先端」口訣学会『口訣研究』第38集、2017年。  
小林芳規「日本訓點の一元流」口訣学会『口訣研究』第17集、2006年。  
小林芳規「日本の訓點表記の起源と展開過程：白点・朱点の始原を中心に」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院『韓国文化』42、2008年。  
小林芳規著、チョン・ジェヨン、アン・ジョンギョン、キム・ジョンビン、ヨン・ギュドン訳『角筆の文化史：見えない文字を読む』韓国文化社、2014年。  
藤本幸夫「李朝訓讀攷其一：『牧牛子修心訣』を中心に」『朝鮮學報』第143輯、1992年4月。

訳出に当たっては、沈元燮 前獨協大学特任教授、金龍 韓国教員大学教授、ソウル大学校師範大学教育学科大学院生 藤田忠義氏の多大な助力を得た。